

自然としての文化的世界と歴史  
——メルロ＝ポンティによる初期マルクスの読解

東京大学 野々村伊純

はじめに

20世紀を代表する現象学者のひとりモーリス・メルロ＝ポンティは、共産党に入党することはなかったものの、40年代半ばからマルクス主義の視点をもって政治的論考を發表している。同じく現象学者でありマルクス主義者として有名な J.-P. サルトルが、「私は読み、教えられ、しまいには夢中になって読んだ」(Sartre 1964: 215/181) と『ヒューマニズムとテロル』について回想しているように、メルロ＝ポンティのマルクス主義論は影響力をもっていた。

そのような背景もあって、これまでの研究では、メルロ＝ポンティの政治や歴史にかんする洞察にマルクス主義を結びつけ、彼の現象学の主題と距離を取ったかたちで論じられる傾向がある。たとえば B. スィシエルは、メルロ＝ポンティにとって「哲学的発言と政治的発言ははっきり分割され」ており、「知覚の現象学という企てのなかに方向性として含まれていない特殊な方向性をマルクスの思想が明らかに打ち出していた」と解釈する (Sichère 1982: 112/120)。あるいは木田元は、メルロ＝ポンティにおいてマルクス主義が実存哲学と等置されていることを指摘しているものの、この等置が「実存」という概念を軸とする当時の彼〔メルロ＝ポンティ〕の歴史の読み方であった」と捉え (木田 1984: 284)、マルクス主義はあくまで歴史について論究するための参照点であったと見ている。

しかしこういった立場とは異なり、マルクス主義の思想が『行動の構造』や『知覚の現象学』の主題と強い影響関係があることを見いだす研究もある (e.g. Low 1987; Smyth 2014)。したがってメルロ＝ポンティにおけるマルクス主義との思想的関係は、彼の哲学的プロジェクトを捉える上でなお検討する必要のある課題である。そのなかで注目には値するのは、メルロ＝ポンティが 1946 年に発表した初期のマルクスを主題とする論考「マルクス主義と哲学」である。この論考では、マルクス主義の歴史や政治について論じるというより、自然と人間による文化との関係について考察され、それによって歴史へと論究が発展している。すなわち、メルロ＝ポンティは歴史と政治にかんする自身の思想とマルクス主義との親和性を見いだす手前で、自然と人間とのより根本的な交流に着目しているのである。しかしメルロ＝ポンティ

における自然と人間の歴史との関係について、とりわけ初期マルクス哲学を視角とした考察が、先行研究で十分に行われているわけではない<sup>1</sup>。

そこで本稿では、初期マルクスの著作にかんする論考から自然と歴史の関係について考察する。それによって明らかにしようと試みるのは、第一にメルロ＝ポンティが初期マルクスの思想を政治哲学に限定しないかたちで受容していること、つまりメルロ＝ポンティは自然と歴史の関係について、マルクスの哲学的立場を自身と共通のものとして理解していることを捉えることである。そして第二に、40年代半ばのメルロ＝ポンティにおける自然と文化および歴史との関係について明らかにする。

まずメルロ＝ポンティによる実存哲学としてのマルクス解釈をみる（第一節）。そしてメルロ＝ポンティが着目するマルクスの「類的存在」と「人間的な自然」の概念を取り上げることで、自然としての文化的世界というメルロ＝ポンティの捉え方を明らかにし、この文化的世界がもつ、歴史との不可分な関係を論じる（第二節）。

## 第一節 実存哲学者としてのマルクス

論集『意味と無意味』に所収の「マルクス主義と哲学」では、初期マルクスの思想が表明されている『経済学・哲学草稿』（以下『経哲草稿』）と『ドイツ・イデオロギー』がおもに取り上げられている。そして「マルクスが思弁的哲学と区別するために批判的と呼んだこうした具体的思考こそ、他の人びとが実存哲学という名のもとに提唱しているものにほかならない」（SNS: 237/196）とし、マルクスの思想が実存哲学であると主張されている。

本節ではどのような点でメルロ＝ポンティがマルクス主義を実存哲学として捉えているのかを検討する。先に述べておくと、メルロ＝ポンティにおいて「マルクス」と「マルクス主義」の区別は曖昧である。しかしそれは当時の文献学的制約によるものであり、「マルクス主義と哲学」ではマルクスの単著『経哲草稿』が最も多く引用され、マルクスとエンゲルスを区別している箇所も見られる（SNS: 224/185）ことから、メルロ＝ポンティはマルクス自身の思想を取り出そうと試みていると本稿では解釈し、「マルクス主義」と言及されているとしても初期マルクスの思想を検討していると考えられる。

さて、メルロ＝ポンティはこの論考の後半において「実存哲学」を次のように特徴づけている。

実存哲学は、たんにまったき自律性のうちで内在的で透明な諸対象を定立する活動と考えられている認識や意識を主題とするところにあるのではなく、実存、つまり一定の自然的歴史的状況のうちでおのれ自身に与えられ、この状況に還元されることもこの状況から引き離されることもできない活動を主題とするところにある。(SNS: 237/196)

主体としての人間を、たんに認識論的な主観ではなく、「自然的歴史的状況」に住み込むとともに、その状況を反省することによって新たに変容させていく実践的な主体として明らかにしてきたことが、実存哲学の成果であるとメルロ＝ポンティは考えている。すなわち、われわれは反省に先立って常にすでに自然と歴史のうちで実存している。このことを強く意識していたのは、現象学的還元の可能性を探究し続けたフッサールである。なぜなら「彼〔フッサール〕は、われわれの状況についての完全な明晰さを手に入れるまさしくそのために、ついには現象学者にその第一の課題として、デカルト的区別のまだおこなわれていない生きられた世界 (Lebenswelt) の記述を課すことになった」(SNS: 239/198) からである。かくして「実存哲学」は、主に後期フッサールの現象学を指しているが、その現象学はまさにメルロ＝ポンティが解釈するそれにほかならない。つまり「実存哲学」はメルロ＝ポンティの知覚の哲学である。その哲学の要点を繰り返せば、「あらゆる思考の地平である自然的歴史的世界のうちに投じられた主体を記述する」(SNS: 239/198) ことである。

そしてマルクス主義が向き合わなければならなかった哲学とは、メルロ＝ポンティいわく実存哲学が問題にしていた古典的哲学なのであった。

哲学が虚偽であるのは、それが抽象的でありつづけ、概念や理性の諸存在のうちに閉じこもり、実際の人間関係を覆い隠す場合だけである。そうした場合でさえ哲学はそうした関係を覆い隠すことによってそれを表現しているのであるから、マルクス主義が望んでいるのは哲学に背を向けることではなく、それを読解し、それを翻訳し、それを現実化しようとすることなのである。(SNS: 235/194)

メルロ＝ポンティによれば、従来の哲学が抽象的な表象によって取り逃ししてしまった具体的な人間関係を捉えることが、マルクス主義にとっての課題である (cf. Dodeman 2015: 119f.)。『ヒューマニズムとテロル』にしたがっ

て換言すれば、マルクス主義は伝統的な哲学を乗り越えて、「人間的共存の問題を徹底的な仕方でも解くこと」を企てている（HT: 111/151）。それではどのようにマルクスはその課題と向き合ったのだろうか。それはメルロ＝ポンティがこの論考のエピグラフとして引き、また『ヒューマニズムとテロル』でも言及する（HT: 109/149）、有名なマルクスの主張に表れていると考えられるだろう。すなわち、「根本的であること、それはものごとをその根において捉えることである。ところで、人間にとっての根とは人間自身である」(MEGA I-2: 177/85)。マルクスの眼目は、人間を物理的対象に還元することでもなければ、悟性的本質に還元することでもなく、そして社会や歴史の問題を経済的諸問題に還元することでもない。そうではなくて、人間をその根本から取り上げることによって、「経済の機能と人間の実現は不可分な仕方になっている」（HT: 109/149）ということをも明らかにすることなのである。

この探究の内実を明らかにするための糸口となるのは、「他人とのわれわれの諸関係は自然とのわれわれの諸関係のなかに読み取られ、自然とのわれわれの諸関係は他人とのわれわれの諸関係のなかに読み取られる」（HT: 110/149）という考えである。つまり自然と社会は相互に表現し合っていることに注目しなければならない。そして時間的に捉えられた社会的営みが歴史であるため、後述のように社会と歴史の関係性を論じる必要があるにしても、さしあたりわれわれが自然と社会の歴史のうちに織り込まれていることも同時に明らかになる。したがってメルロ＝ポンティの考えでは、マルクス主義の唯物論とは「この社会が自然とのその基本的な関係を打ち立ててきたやり方」にかんする、つまり「実践、あるいは歴史の具体的場としての社会的実存にかんする理論」（SNS: 231/191, 234/193）なのであって、自然的歴史的状況のうちに投げ込まれている人間を捉えることを試みるものなのである。

以上のことから、メルロ＝ポンティが実存哲学とマルクス主義を並べる理由が明らかとなるだろう。両者の共通点は双方の企ての目標であり、すなわちどちらもこれまでの主流の哲学において見落とされていた「自然的歴史的」に位置づけられた主体を明らかにするという目標である。そのためマルクス主義と実存哲学の目標がどちらも達成された場合、両者の成果は同じ事柄の別の表現なのである。

## 第二節 自然としての文化的世界と自然史

自然的歴史的に位置づけられた主体を明らかにする両者の企ては、自然と

歴史との関係について問われることになるだろう。ある立場によれば、歴史は一回限りの人間の活動によって生起する出来事の意味であって、普遍的な法則によって事象を説明する自然科学の領域とは異なる人間精神独自の領域であるが、別の立場によれば、歴史は科学的にその発展を捉えることのできるものである。メルロ＝ポンティはこういった自然と歴史の関係の問題を明白に認識している。というのも、上で指摘したように「マルクス主義と哲学」の前半部分は、まさにマルクス主義における自然と歴史を論じているからである。

この論考でメルロ＝ポンティがまず取り上げるのは、マルクス主義を自然科学的に解釈する立場である。言及されている何人かのうち P. ナヴィルが典型的であろう。彼は、自然科学が物理的自然の法則を明らかにしようと試みるのと同様に、経済学は自然科学の手法を用いて「社会的自然」の法則を明らかにしなければならないと主張する（cf. SNS: 221/183）。つまり人間の活動は科学の対象なのである。しかしメルロ＝ポンティの考えでは、マルクス主義はこういった科学主義の立場とは異なる。「人間社会、特に経済社会についてのマルクス主義の考え方では、この社会を古典物理学の諸法則のような不変の諸法則に従わせることはできない」（SNS: 222/184）からである。むしろ科学主義的な立場は、メルロ＝ポンティが G. ルカーチの指摘を参照しながら主張するように、人間を物理学的対象と同じように実証主義的に扱い、それによって生きられた人間関係を奪う「疎外ないし客体化（Verdinglichung）の一特殊例」である（SNS: 223/184）。ここからメルロ＝ポンティは疎外と客体化を区別せず、これらを『知覚の現象学』において問題化された、実存を忘却する「客観的思考」の一つとして解釈していると見出すことができる。

では、メルロ＝ポンティや彼のマルクス主義の立場からすれば、人間にとって自然と社会の関係はいかなるものなのであろうか。その考えを端的に表しているのは、自然が弁証法的であるのはなぜなのかという問いに対するメルロ＝ポンティの答えである。

この状況の論理が発動され、展開され、そして成就されるのは、人間的生産力によってであり、この生産力がなければ、与えられた自然的諸条件の活動が経済ましてや経済史を出現させたりはしないだろう。（SNS: 229/189）

「状況の論理」とは、人間が自然的歴史的世界のうちに投げ込まれながらも、そういった世界に決定づけられていないという実存の弁証法のことを指す。そして「人間的生産力 (productivité humaine)」が、自然的歴史的世界を生起させるための動力となっていると主張されている。周知の通り「生産力」は、マルクス主義の史的唯物論における根本概念であるが、ここでの人間的生産力をスターリン主義的な生産手段や労働力に限定して解してはならない。なぜなら、ここでの人間的生産力について注目すべき点は、状況の論理を発動し、展開し、成就することを可能にする動因的性格にあるからである。「人間的生産力」は、すでにある状況のなかでの産出と新たな状況の産出として二重化される。さらにこの引用の直後には、この生産力によって人間と動物とを区別するマルクスの考えが取り上げられる。したがって「人間的生産力」は状況に対する人間の力動性として捉えられており、人間とそれ以外の動物とを区別する人間の特徴なのである。このような人間的生産力の内実について、メルロ＝ポンティは初期マルクスが論じる「類的存在」と「人間的な自然」からより詳細に明らかにしようとしている。

### (1) 類的存在 (l'être générique; Gattungswesen)

『経哲草稿』において中心的な議論となっているのは疎外論である。マルクスは対象化としての労働に注目することによって、労働を通じた生産主体としての人間の自己実現と自己確証を見定め、私的所有を通じて人間本来の対象化としての労働が妨げられていると捉える。つまり疎外論は人間本来のあり方としての「本質」からの疎外を問題としている。労働を通じて実現する人間の本来のあり方は、ヘーゲルの類と個体についての議論に影響を受けながら、直接的には L. フォイエルバッハと M. ヘスに倣って導入された「類的存在」として捉えられている。(cf.クヴァンテ 2019: 54-58)

人間とそれ以外の動物は類的存在か否かで区別される。マルクスによれば、動物は食べたり飲んだりする「生命活動 (Lebensthätigkeit)」(MEGA I-2: 240/95) にほかならない。メルロ＝ポンティも言及するように、動物は自然的所与に応答するだけで、たとえ牛や豚といった家畜が人間の経済構造に組み込まれているとしても、あくまでも人間の活動の所産でしかなく人間社会に参加しているわけではない。他方人間の場合、身体的欲求に基づいた生命活動を行うだけでなく、各個人は自身の類としての普遍的特性を認識し、その本来のあり方を実現しようとする。つまり人間は自分とは異なるものを対象とするだけでなく、自分自身をも対象としている。人間は「自分自身に

対してある存在」であるがゆえに、類的存在なのである（MEGA I-2: 297/208; cf. SNS 228/188）。

メルロ＝ポンティは、このような「自分自身に対してある存在」としての類的存在を自己意識として捉えることを批判する。なぜなら、人間を自己意識に限定して定義してしまうと、主知主義と同様に自分自身の実存から切り離されてしまうからである。むしろ「社会そのものが人間を人間として生産するのと同じように、社会は人間によって生産されている」ため、「社会的存在」として人間を捉えなければならない（MEGA I-2: 264f./134; cf. SNS: 227f./188）。マルクスは次のように述べる。

自然の人間的存在は、社会的人間にとってはじめてある。なぜなら、ここではじめて自然は、人間にとって、人間との紐帯として、他の人間にたいする彼の現存〔Dasein〕として、また彼に対する他の人間の現存としてそこにあるからであり、ここではじめて、人間的現実の生活基盤としてあるのと同様に、自然は人間自身の人間的あり方の基礎としてそこにあるからである。（MEGA I-2: 264/133）

人間は他の動物のように欲求に従って自然に対するだけでなく、他の人間との交流によって自然の一部として自身の人間的現実を実現する。メルロ＝ポンティの言葉を借りれば、人間は「自然をわがものにする一定の様式——他人との関係の様式もそこに描きこまれている——に組み込まれている」（SNS: 228/189）。すなわち各人は他者によって作り出されもすれば逆に他者をつくり出す相互関係にあり、その「継時的かつ同時的な共同体」（SNS: 228/189）の基礎として自然が存在しているのである。

しかし、自然が人間の共同体の基礎としてあるならば、それは結局のところ人間とは切り離されて即自的に存在することを意味しているのだろうか。マルクスの引用箇所における「ここではじめて（erst hier）」に、現実性の獲得について対象を所与とせず捉えようとする『1844年パリ草稿』の「特有の論理」（秋元 2018）を見出すこともできるだろう。しかし本稿では、メルロ＝ポンティが注目する「人間的自然」というマルクスの概念を取り上げて、詳しく見ていくことにしたい。

## (2) 人間的自然 (nature humaine; menschliche Natur) <sup>2</sup>

メルロ＝ポンティは、マルクスが『経哲草稿』において自然な人間関係について男女の関係をもとに論じている箇所から、男女の関係の議論と結びつかないよう周到に省略するかたちで「人間的自然」を引用する。

〔人間は〕文化的世界を構成し、そこにおいては「人間の自然的ふるまいが人間的になり……、人間的存在 [l'être humain] が人間の自然的存在になり、その人間的自然がその自然となってしまう」  
(SNS: 230/190; cf. MEGA I-2: 262/129) <sup>3</sup>

「人間的自然」という概念は、マルクスにおける自然と人間の二元論を克服する脱近代的でエコロジカルな思想として、とりわけ 21 世紀のマルクス研究において注目されている。自然を人間的なものにする「人間的自然」は、人間による自然の支配であると見なされる恐れがあるが、マルクスが強調するのは、人間的自然が「人間に作用し人間の感性を人間的なものにさせていく」(尾関 2019: 311) という側面である。

というのも、たんに五感だけではなく、いわゆる精神的諸感覚、実践的諸感覚(意志、愛など)、一言でいえば、人間的感覚、諸感覚の人間性は、感覚の対象の現存によって、人間化された自然 [vermenschlichte Natur] によって、はじめて生成するからである。(MEGA I-2: 270/140)

人間は自然に対して働きかけることによって自然を人間化する。この働きかけは対象化としての労働にほかならない。すでに確認したように、人間にとって労働は類的存在としての自己を実現し、同時に自分自身を確証することであるため、人間は人間的自然との交流によって人間的な感覚を獲得し、より人間として進展していく。したがってマルクスの議論では、「人間と自然の「共進化」的な事態が語られている」(尾関 2019: 312) のである。

同様の議論は、『知覚の現象学』において具体的に論じている箇所を見出すことができる。そこではまず人間の感情における文化的側面が指摘される。

ある人間が自分の身体をどう使用するかということは、たんなる生物学的存在としてのこの身体を超越した事柄である。怒ったときに叫び、愛情を感じて接吻をすることは、テーブルのことをテーブルと呼ぶ以上に自然的なことでもなければ、より少なく慣習的なことでもない。感情と情動的なふるまいは言葉と同様に発明される。父子関係の情のように、人間の身体のなかに刻み込まれているようにみえる感情でさえも、本当は制度である。(PP: 220f./1. 310)

メルロ＝ポンティは、人間の怒りや愛情のふるまいが生物的自然ではなく、むしろ言葉と同じように慣習的であることを指摘し、さらに B. マリノフスキが報告するトロブリアンド諸島で見られる母系社会の事例を取り上げ、父子関係という一見したところ非文化的で自然的なものと思われるものでさえも社会的に形成された文化的なものの一つであると主張する<sup>4</sup>。その上で次に主張されるのは、「人間においてはすべてが加工されたものであり、かつすべてが自然的である」(PP: 221/1. 310) という点である。つまり人間が創造し与えた意味であっても、文化的世界においてはそれが同時に人間的な自然となっている。なぜなら、動物が自然環境のうちで生きているのと同様に、人間は社会に拠って立って生を営んでおり、文化的世界に住み込むことなく人間として生きていくことはできないからである。したがって、文化的世界をたんなる社会的構築物とするのは事態の不十分な認識であって、「人間の世界は、自然的世界や動物の世界とどれほど異なっていようとも、いわば人間にとっては自然的である」(SNS: 208f./174) という点を捉えなければならない。人間の生にとって必要不可欠なこのような世界は、自然としての文化的世界と呼べるだろう。

メルロ＝ポンティによれば、古典哲学はこのような人間が住み込んでいる自然としての文化的世界を解体してしまった。「道路や畑や家などは、それら〔古典的哲学〕にとっては、あらゆる点で自然の諸対象と比べうるさまざまな色の複合体であり、ただそれが二次的な判断によって人間的意味をまとわされたということにすぎなかった」(SNS: 232/192)。ここで言及されている「色の複合体」とは、『知覚の現象学』で詳しく論じられているように、対象を感官にしたがって分解し、その諸性質の総合として理解されたもののことである。そのような考え方のものである。たとえば道路の舗石は人間が材料を加工し、それを敷くことで整備されたものであって、もともとの材料は非人間的な自然物であるのだから、結局のところ自然物の複合体であり、舗道は

二次的な解釈でしかない。

しかしマルクスが導入し、現象学も展開させている「人間的対象 (objets humains)」は、事態がまったくもって異なることを示す。「マルクスは、人間的対象について語ることによって、われわれの経験にあらわれるがままの対象にこの〔人間的〕意味が付着してしまっていることを言おうとしているのである」(SNS: 232/192)。つまり、われわれはまず人間的な意味でもってあらゆるものと経験のうちで出会うのであり、科学的な即自的自然こそ、むしろ二次的な理解なのである。言い換えれば、科学は客観化された事象を無時間的な法則によって理念的に捉えようとするため、科学それ自体は文化的世界の一部であっても、技術へと応用されないかぎり人間によって住み込まれた人間的な自然を形成することはない。それどころか生きられた関係を疎外してしまう。メルロ＝ポンティの考えでは、マルクスにおける人間の自己実現としての労働によって、身体を介した自然との文化的な交流としての弁証法をわれわれは捉えるべきなのである<sup>5</sup>。

もっとも、メルロ＝ポンティは人間の活動の総体が自然の全体であると考えているわけではないことに留意する必要があるだろう。「自然的世界はすべての地平の地平であり、すべての様式の様式」(PP: 381/2.186)なのであって、人間の生を越え出ている。ただし、そのような汲み尽くすことのできない自然は、文化的なものからいわば「透けてみえてくる」(PP: 339/2.133)ものであり、「人間がみずからの生活に形態をあたえてきた自発的な働きが、外部に沈殿し、そこで事物としての匿名の存在を生じさせる」(PP: 400/2.210)ことを見失わないことが重要である。自然は人間を越えたものでありながらも、人間は自然の一部にはかならず、自然と生きた交流を行っている。このような自然は「科学の自然ではなく、知覚が私に示してくれる自然」(PP: 494/2.339)である。つまり、自然において人間の意味と人間からの超出が結びついているのであって、たんなる観念論とも唯物論とも異なる「自然主義と人間主義の統一」が見出されている。

こうしてメルロ＝ポンティにとって自然としての文化的世界は、人間と切り離されて存在する科学が対象とするような即自的自然ではなく、人間を越えていながらも人間的意味が浸透し、それを利用しながら人間が生活している社会的な生としての「人間的な自然」である。人間と自然の関係は、人間が自然を超越した立場から自然を観察する「超自然的 (surnaturel)」関係ではなく、人間が住み込み、そこでの産出物を利用しながら生活し、新たな人間的な自然を生み出していく「変革自然的 (transnaturel)」関係と言えよう (SNS: 230/190)。ここに『知覚の現象学』において論じられた実存における

「超越」の運動が見て取れる（cf. Dastur 2001: 45）。

以上のような変革自然的な場面こそ歴史であるとメルロ＝ポンティは主張し、マルクスの「歴史は人間の真の自然史である」（MEGA I-2: 297/208）という記述を引用する。自然としての文化的世界が明らかになったいま、この主張を理解することは難しくない。人間は労働によって自然に働きかけ人間的自然を生成するが、人間の生が営まれている人間的自然の内部に住み込みながら、そこで産出されたものを利用し、新たな自然を創り出す。したがって、この住み込んでいる自然に対する働きかけは、社会において受け継がれ、積み重なっている。

〔…〕そこ〔歴史〕においては、どの段階にあってもひとつの物質的な成果、生産諸力の総和、歴史的につくりだされた自然に対する関係と諸個人相互の関係が存在し、そしてこれらのものを各世代はまえの世代から受け継ぎ、生産諸力と資本と環境の総体は、確かに一方では新しい世代によって変えられるが、他方ではその世代に固有の生活諸条件を定めるものでもあって、その世代に一定の展開、ある特殊な性格をあたえる〔…〕。（MEGA I-5: 46/78f.）

この引用では産業的な生産手段だけが受け継がれているようにも思えるが、すでに確認した自然に対する人間同士の社会的な交流を重視するマルクスの姿勢は、エンゲルスによる草稿に「歴史的につくりだされた自然に対する関係と諸個人相互の関係」をマルクスが書き加えていることにも表れている（cf. MEGA I-5: 887）。実際、すでに引用した箇所では、意志や愛といった「精神的諸感覚、実践的諸感覚」が人間的自然として生成されたと言及され、その直後には「五感の形成はいままでの全世界史の一つの労作である」（MEGA I-2: 270/140）と指摘されている。メルロ＝ポンティも社会の中で受け継がれていく父子関係について、自然としての文化的世界に属していると指摘する。すなわち、彼らにとって自然としての文化的世界は継時的で同時的な交流の総体なのであり、したがって歴史にほかならないのである。「いわゆる世界史全体は、人間の労働による人間の産出〔Erzeugung des Menschen〕、人間にとっての自然の生成〔Werden der Natur〕以外の何ものでもない」（MEGA I-2: 274/147; cf. SNS: 229/189）。彼らにとって主観的意味でも客観的帰結でもなく、人間的自然の継起こそ歴史なのである。

## おわりに

本稿では、マルクスの思想は自然的歴史的に位置づけられた主体を記述する企てであるとメルロ＝ポンティが捉えていることを明らかにし、彼が注目する二つのマルクスの概念「類的存在」と「人間的自然」から自然と歴史の関係についての彼の捉え方を考察した。メルロ＝ポンティがマルクスを通じて見出す自然は、科学的な即自的自然ではなく、人間から超出しながら人間的意味が浸透する、人びとと自然が相互に作用しあうことができる自然としての文化的世界である。自然に対する働きかけとしての労働は、文化的世界に住み込みながら新たな自然を創り上げていくこと、つまり人間的自然を受け継ぎながら進展させることであるがゆえに、自然としての文化的世界は歴史的なのである。

メルロ＝ポンティはマルクスの思想を、たんに歴史や政治を論じる上での参照点として利用したのではなく、むしろ自然と人間との関係、自然と歴史との関係という根本的な点で自身の思想と深い共通点を見出した。人間と自然との関係、歴史と自然との関係についてのマルクスの主張は、メルロ＝ポンティの哲学的立場と強く共鳴しているのである。

## 注

- 1 たとえば Dodeman (2015) は、メルロ＝ポンティにおけるマルクスの思想と自然との関係について、主に 50 年代のテキストに依りながら注目すべき検討を行っているが、40 年代のテキストにおけるマルクスの思想とかわる自然と歴史の関係を問題にしていない。また中 (2008) は、自然と文化の関係についてカッシーラーと比較しているが、マルクスと関連付けてはいない。
- 2 哲学の伝統的文脈においてこの語は「人間本性」と訳される意味で用いられているが、本論で示すようにここでの意味は、人間化された自然を指しているため「人間的自然」と訳す。
- 3 メルロ＝ポンティの引用とマルクスの原文で強調されている語が異なっている。ここではメルロ＝ポンティの強調にしたがう。
- 4 この事例はソルボンヌ講義でも取り上げられる (cf. 酒井 2019)。
- 5 「人間的労働は第三の弁証法を開始する。というのも、それは人間と物理 - 化学的刺激とのあいだに、「使用対象」(Gebrauchsobjekte) ——衣

服、机、庭——や「文化的対象」——本、楽器、言語——など、人間固有の環境を構成して行動の新しいサイクルを出現させるものを投射するからである」(SC: 245f./241)。

## 文献表

### メルロ＝ポンティの著作

メルロ＝ポンティのテキストを引用するにあたっては、以下の略号を用いて原著の頁数と訳出の際に参照した邦訳の頁数を表記する。なお引用中の強調は原著者によるものであり、[] と […] はそれぞれ引用者による補足と省略を示す（以下同じ）。

HT: *Humanisme et terreur : Essai sur le problème communiste*, Gallimard, 1947.『ヒューマニズムとテロル——共産主義の問題に関する試論』合田正人訳、みすず書房、2002年。

PP: *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945.『知覚の現象学 1』竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967年；『知覚の現象学 2』竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、1974年。

SC: *La Structure du comportement*, 2013 [1943].『行動の構造』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1964年。

SNS: *Sens et non-sens*, Nagel, 1966 [1948].『意味と無意味』滝浦静雄・粟津則雄・木田元・海老坂武訳、みすず書房、1983年。

### マルクスの著作

マルクスのテキストを引用するにあたっては、新 MEGA 版 *Marx/Engels-Gesamtausgabe* を用いる。略号 MEGA に続いてローマ数字で部門を、アラビア数字で巻号を記し、該当の頁数と訳出の際に参照した以下の邦訳の頁数を表記する。

マルクス『ユダヤ人問題によせて——ヘーゲル法哲学批判序説』城塚登訳、岩波書店（岩波文庫）、1974年。

マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波書店（岩波文庫）、1964年。

マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』渋谷正編・訳、新日本出版社、1998年。

### その他の文献

- Dastur, Françoise (2001) *Chair et langage: essais sur merleau-ponty*, Encre Marine.
- Dodeman, Claire (2015) « Marx et l'élaboration du concept de nature dans la philosophie de Merleau-Ponty », *Actuel Marx* (58), pp. 118-129.
- Low, Douglas B. (1987) *The Existential Dialectic of Marx and Merleau-Ponty*, Peter Lang Publishing.
- Sartre, Jean-Paul (1964) « Merleau-Ponty », dans *Situations, IV : Portraits*, Gallimard. 「メルロー・ポンチ」平井啓之訳、『シチュアション IV——肖像集』サルトル全集第三十巻、人文書院、1964年、158 - 244 頁。
- Sichère, Bernard (1982) *Merleau-Ponty ou le corps de la philosophie*, Grasset & Fasquelle. 『メルロ＝ポンティあるいは哲学の身体』大崎博訳、サイエンティスト社、2003年。
- Smyth, Bryan A. (2014) *Merleau-Ponty's Existential Phenomenology and the Realization of Philosophy*, Bloomsbury.
- 秋元由裕 (2018) 「初期マルクスの本質概念——その反本質主義的実質について」、日本哲学会編『哲学』(69)、140 - 154 頁。
- 尾関周二 (2019) 「マルクスの脱近代思想とエコロジー的潜勢力——エコロジーをめぐる連帯の拡大へ向けて」、伊藤誠・大藪龍介・田畑稔編『21世紀のマルクス——マルクス研究の到達点』新泉社、302 - 333 頁。
- 木田元 (1984) 『メルロ＝ポンティの思想』岩波書店。
- クヴァンテ, ミヒャエル (2019) 『カール・マルクスの哲学』大河内泰樹・瀬川真吾・明石英人・菊池賢訳、リベルタス出版。
- 酒井麻依子 (2019) 『メルロ＝ポンティ現れる他者／消える他者——「子どもの心理学・教育学」講義から』晃洋書房。
- 中敬夫 (2008) 『歴史と文化の根底へ——《自然の現象学》第二編——』世界思想社。